



Title	自律的観光から持続可能な地域を目指して : エコツーリズムという試み
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	大交流時代における観光創造, 70, 75-96
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34589
Type	bulletin (article)
File Information	p075-096.pdf



[Instructions for use](#)

自律的観光から持続可能な地域を目指して

— エコツーリズムという試み —

敷 田 麻 実

エコツーリズムという言葉がメディアでも当たり前のように使われている。エコツーリズムに特別な関心がなくても、「エコ」がついているので、「環境にやさしい観光」と考える人は多いだろう。そのとおり、エコツーリズムは、環境に配慮しながら観光を楽しむことを特徴とした「新しい観光」の1つである。

今までの観光は、観光地の環境や社会に対する思案が少なく、単に観光する場所として観光地を捉えていたため、ほとんどの観光地で観光の弊害が発生していた。そこで、マストツーリズムという言葉で表現される今までの観光ではない、別のスタイルの観光（Alternative tourism）が望まれるようになり、その1つとして生み出されたのがエコツーリズムである。

しかし、先進地である西表島や小笠原諸島などでエコツーリズムの具体的な事例が生まれても、エコツーリズムの持つ意味や効果は十分に議論されていない。そのために、優れた地域づくりツールであるエコツーリズムが、単に今までなかった新しいタイプのいわば「新たな観光」としてしか扱われないことも多い。とはいえ、現実にエコツーリズムが各地で実践され始めている以上、観光関係者¹であれ、地域づくり（地域振興）関係者であれ、新しい

1 「観光事業者」とほぼ同義だが、地域には専業ではない観光事業者もいるので、ここでは「観光関係者」とした。実際には、宿泊施設やみやげ物店の経営者・従業員、関連事業者が含まれる。環境省は、エコツーリズムの場合に「エコツアー事業者」を用いているが、事業を行っていないボランティアなども含めて、ここでは観光関係者とした。

動きでもあるエコツーリズムについて理解を深めることは重要であろう。

そこで本稿では、1995 年ごろから国内でも注目され、また地域づくりの方法としても期待を集めている「エコツーリズム」について、地域の自律性の観点から議論する。さらに、持続可能な社会の重要性が強調される現在、持続可能な地域にするためにはエコツーリズムなども含めた新たな観光をどう取り入れていくべきかについて言及したい。

1. エコツーリズムとエコツアー

エコツーリズムやエコツアーの定義は、時と場所、また人によって違いがある。しかし明確な枠組みや概念があるからこそ、新たな創造が生み出される。それはちょうど、俳句や短歌が明確な形式を持っているからこそ、無限の創造活動を誘導することに似ている。エコツーリズムという枠組みがあってこそ、さまざまなエコツアーが作り出されるのだ。そのためここではエコツーリズムとエコツアーの定義を改めて提示したい。

(1) エコツーリズムとは何か

エコツーリズムの定義は多様だが、国際エコツーリズム協会(The International Ecotourism Society)によれば、それは「自然環境を保全し、地元住民の福祉の向上につながる責任ある旅行」²である。また一般的には、マスツーリズムからの「もう1つの選択肢 (Alternative to mass tourism)」であると考えられている (Cater et al., 1994)。

オーストラリアの Ecotourism Australia は、自然環境体験に重点を置き、エコツーリズムとは、「自然環境体験を最大の関心としながら、環境や文化を理解・尊敬・保全することを涵養する生態学的に持続可能な観光」であると

2 TIES の HP (<http://www.ecotourism.org/>) では、“Responsible travel to natural areas that conserves the environment and improves the well-being of local people.”と定義している。

説明している³。日本エコツーリズム協会でも、エコツーリズムの定義は多岐にわたるとした上で「地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護・観光業の成立・地域振興の融合を目指す観光」⁴ だとしている。

以上のような定義の特徴を捉えた上で簡潔に説明すると、エコツーリズムとは「与える負荷を最小限にしながら自然環境を体験・学習し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」となる（敷田・森重、2003 を参照）。もちろん自然環境だけではなく、文化遺産が対象になることもあるが、現在の国内の観光現場では、自然環境が対象となっていることが多い。

ところで、ここまでの定義では「観光」の意味を明確にしなかったが、一般に日本語の観光は、「観光旅行」などとしても日常使われているので、この点では観光はツアーつまり旅行や旅行商品を含む、比較的あいまいな用語である。しかしエコツーリズムの場合、「ツーリズム」には特別な意味が込められている。それは、エコツアーを実施する際の基本的な考え方やツアー創出の仕組みということである。

エコツアーを実施する基本的な考え方の存在は、エコツーリズムが誕生した背景にある3つの理念、環境保全・地域振興・観光振興を前提にしている。一般の観光が「特別な理念」を持たなくてもいいことに対し、この考え方に基づきエコツアーが実施されていることが、エコツーリズムでは多い。またこのような理念の問題だけではなく、具体的にツアーをつくり出さなければ「旅行」にはなり得ないので、旅行商品をつくり出す仕組みとしての面も持ち合わせている。以上の点から、エコツーリズムは「自然環境への負荷を最小

3 Ecotourism Australia の HP (<http://www.ecotourism.org.au/>) によれば “Ecotourism is ecologically sustainable tourism with a primary focus on experiencing natural areas that fosters environmental and cultural understanding, appreciation and conservation” とされている。

4 日本ツーリズム協会の HP (<http://www.ecotourism.gr.jp/>) から著者が³一部を略して紹介した。

限にしながらそれを体験・学習し、目的地である地域に対して何らかの利益や貢献のあるツアーをつくり出し、実践する仕組みや考え方」と考えることができる。この点では、一般的に「観光」と説明されている言葉とは明らかな違いがある。

ところで、エコツーリズム以外にも「自然を楽しむための観光」の同義語は存在する。例えば「ネイチャーベースドツーリズム (Nature-based tourism)」(Valentine, 1990)、「ネイチャーツーリズム (Nature tourism)」(Romeril, 1989)などをあげることができる。また Wheeler (1992) は soft, green, eco-, gentle, appropriate, responsible など「新しい観光」にはさまざまな名前がつけられていると指摘している。Laarman and Durst (1987) は、ネイチャートラベル (Nature travel) は「教育やレクリエーション、時に冒険を取り入れたスタイルの観光」だと説明している。このようなエコツーリズムの定義や類義語は、過去には敷田らによって整理されているので参照されたい⁵。

(2) エコツアーとは何か

考え方とエコツアーをつくる仕組みであるエコツーリズムに対し、エコツアーとは「観光目的地への負荷を最小限にしながら自然環境を体験・学習し、地元に対して何らかの利益がある旅行商品」である⁶。余暇活動として個人が自主的に参加・実施する活動である「レクリエーション」とは異なり、ツアーとは購入することができるサービスや商品になったものを指す。

ただし、この定義を厳密に当てはめると、登山やバードウォッチングなど、個人（1人）で行動し、旅行商品に参加しない場合はエコツアーとは呼べない。しかし、登山なども地域や生態系に与える影響を考える点では旅行商品

5 エコツーリズムにかんする定義や同義語は、敷田・森重 (2001a) によってそれまでの経過も含めてまとめられている。

6 ただし、販売されていない、例えばボランティアによるガイドツアーや旅行の一部として催行される「オプションツアー」、自然学校などで行われている「プログラム」なども含めて考える。

としてのエコツアーと同じなので、マネジメントの点からは、エコツアーに含めて扱うことが望ましい。

また最近では、地域の「宝さがし」や地域資源評価のためのエコツアーが地域づくりの現場で行われることも多い。さらに、旅行商品の一部またはオプションツアーとして、地域の自然環境を体験しながら学ぶ「プログラム」が提供される機会も増えている。こうした「エコツアー」は、厳密に言えば旅行商品ではないが、地域ではこれもエコツアーと呼ばれている。

そのため、以上をまとめて、本稿ではエコツアーを「エコツーリズムという考え方に基づいて作り出された、観光目的地への負荷を最小限にしながら自然環境を体験・学習し、地元に対して何らかの利益がある旅行商品やプログラム」とまとめることにする。

(3) 2つのエコツーリズム

エコツーリズムとエコツアーをこのように定義しても、実際にはまだ問題が残る。エコツーリズムやエコツアーを使う機会や使う立場によって、意味が異なる場合があるからだ。特に国内に限って言えば、大きく分けて「2つの」エコツーリズム、そしてそれに応じて2つのエコツアーが存在する。その1つは「地域づくりや環境保全」のためのエコツーリズム、もう1つは旅行業界の「新たな観光」としてのエコツーリズムである。

まず図1に示すように、多くの地域ではエコツーリズムが地域づくりや環境保全活動のプログラムとして行われている。エコツアーは、おそらく地域づくりイベントと同じレベルの活動であり、地域で「ツアー（旅行商品）」をつくるという感覚は比較的薄く、旅行業法による旅行だという自覚もない。しかし、地域づくりのツールとしてエコツアーを活用し、観光客の来訪による地域再生を期待するという地域の創意工夫を、「旅行商品ではない」、「正統なエコツーリズムではない」と単純に否定することはできない。

一方、旅行業界が考えるエコツアーは「新たな旅行商品」である。こちらにはあくまで「旅行商品」としてのエコツアーが基本で、一定の収益を目指している。JTBグループの体験型パッケージツアー「ファール」はこの典型例であろう。この場合には、エコツアーによる集客数や収益が重視され、地

主体	エコツアーの性格	エコツーリズムの位置付け
旅行業界	旅行商品としてのエコツアー (新たな旅行商品)	新たな観光としての エコツーリズム
	両方の性格を持つエコツアーやエコツーリズムが存在する	
地域	①地域づくりの手法としての地域エコツアー (お宝探しや地域資源発掘、活性化) ②環境保全手段としてのエコツアー (保全資金調達や自然環境価値の再評価)	地域づくり・環境保全としての エコツーリズム

図1 2つのエコツーリズム・エコツアー

地域はもっぱら観光客を送り込む観光目的地に位置づけられる。そのため、地域側から見ればいわゆる「マスツーリズム」と同じ構造だという批判を避けることはできない。

このように地域側のエコツーリズムは「地域づくりや環境保全プログラム」、旅行業界は「新たな観光」という認識の差があり、その結果がエコツーリズムやエコツアーの定義が混乱する原因にもなっている。ただし、地域のエコツーリズムが、地域づくりや環境保全から旅行業界のそれに接近する場合もある。地域づくりの一環から、反復継続してエコツアーを実施し、運営規模も拡大するケースである。それが「成功例」として紹介されることも多い。最近の旅行業法「施行規則」の改正で、第三種旅行者による近隣市町村へのツアーの募集が可能になったこともこれを加速している。

しかしこのような場合には、地域内の活動が中心の地域づくりエコツアーから、地域外の観光システムを相手にした「観光」としてのエコツーリズムに踏み込んでいることの認識が必要である。その認識がないと、エコツアーの拡大だけが目的となり、エコツーリズムの理念を欠き、持続可能であるという重要な点が見過ごされがちになる。エコツーリズムの推進とエコツアーによる地域づくりや環境保全は、観光の悪影響をコントロールできる場合に限って有効である。

この関係は「焚き火」にたとえることができる。地域の関係者が試みとし

てエコツアーを実施することは、いわば火遊びレベルの小さな焚き火である。火遊びとしての焚き火は一般には危険な行為だが、一方で火の使い方を覚えるという機会にもなる。つまり地域の比較的小規模なエコツアーづくりを通じて、観光としてのノウハウの蓄積を進め、ゆくゆくは産業化を図ってゆくという適度でコントロール可能な「小規模の火遊び」が地域づくりエコツアーであろう。ところが規模を拡大し、継続的に観光客を受け入れることになる、それは大きな焚き火になり、火力維持のためにより多くの薪（観光客）をくべるようになる。その場合には、一時に燃え上がって手に追えなくなぬように、焚き火の「マネジメント」が必要である。

この状態は図1の2つのエコツアー・エコツーリズムの中間部分にあたる。地域のエコツーリズム関係者が、これを「成長だ」として進むのか、またはあえて地域のエコツアーの規模にこだわり、現在の地域のマネジメント力で手に追える範囲で維持するのか慎重に考える必要がある。またどちらの選択であっても、今の社会情勢からは、持続可能な観光であることが重要な基準となるだろう。

2. エコツーリズム誕生の背景とその後の歴史

エコツーリズムという言葉がいつから使われ始めたかについては先行研究を見ても明確な答えは見つけにくい(Blamey, 2001)。しかし Weaver(2001)によれば、その創始は Hetzer によって示された ecotourism (ecological tourism) や 1973年にカナダの森林局が使った educational ecotour だとされている。これと並行して、研究者などがガラパゴス諸島を訪れることが一般化して観光化した例 (Scientific tourism) や (Laarman and Durst, 1986)、野鳥の観察地を文字通り飛行機で飛び回るアメリカのバードウォッチングツアーも紹介されているが (Duffie, 1981)、当時はまだ一般の観光客が気軽に参加する観光ではなかった。

しかし、特に 1980 年代後半から、海外では観光パンフレットやメディアに「エコツアー」や「エコツーリズム」が頻繁に現れ始め、急速に普及した。それを指摘した Boo (1992) は、この現象を「自然保護分野と旅行業界の両方

のニーズが一致した結果」だと述べている。Boo の指摘によれば、自然保護分野では、開発と自然保護の調和や自然保護に対する経済的支援の要望があり、逆に観光産業には、観光資源としての自然環境の再評価や自然環境体験観光への観光客の嗜好変化があった。

その背景には、マスツーリズムの台頭と飽和があった。世界観光機関(WTO)によると、1950年に約2,500万人であった世界の観光客数(国際観光客到着数)は、1980年にはその10倍以上になった。しかしマスツーリズムも飽和状態に達し、特に1980年代前半の世界的な景気悪化によって観光産業は停滞し⁷(Pearce, 1987, French, C. N. et al., 1995)、その解決策として、短期間で客が多く消費支出をするエコツーリズムのような観光がマスツーリズム側から「新たな観光」として期待された。その点では、マスツーリズムというシステムの延命策としての旅行商品だと言えなくもない。また観光客側も、マスツーリズムでの「普通の」観光に満足できず、特定の目的を持つ観光(SIT、「Special interest tourism」)(Troumbis, 1991)へ嗜好が移っていた。こうした需要は観光産業側も意識せざるを得なかった。

一方、観光システムは、マスツーリズム化によって「観光公害」を生み出し、特に地域の自然環境や地域社会に悪影響を及ぼした(McElroy and deAlbuquerque, 1990 ほか多数)。それは観光目的地である地域にとって大きな問題であり、また1980年代からの世界的な環境保護運動の高まりもあって(岡島, 1990)、地域や自然保護関係者はマスツーリズムに対抗して、「もう1つの観光(Alternative tourism)」や「適切な観光(Appropriate tourism)」を目指すようになった。それと同時に、環境保全にかかるコストを観光収入でまかなえないかという発想や、環境保全のためのインセンティブ(誘因)としての観光収入という考えが地域側から出てきた。

以上のような背景があって誕生したのがエコツーリズムであった。つまりマスツーリズム側の「新しい観光(=新旅行商品)」への期待と、マスツーリ

7 このことは世界観光機関(UNWTO)の観光統計からも読み取れる。1980年から1983年までの4年間の観光客数は、2億7-8,000万人前後で停滞している。

ズムではない「新たな観光(=環境に配慮した観光)」を生み出すという地域側の動きが同時に進行した結果なのである。そして、今までにない観光を生み出すという「革新」によってエコツーリズムが誕生したことが、その後のエコツーリズムに対する期待となっている。

そして1980年代から1990年代にかけて、もう1つの観光として生み出されたエコツーリズムは、結果的に融合しながら、新たな概念である「サステイナブルツーリズム(持続可能な観光)」に収斂してゆく。それを図2-1~5に示した。

まずマスツーリズムとは別の「もう1つの観光」として生まれたエコツーリズムは、対極にある観光として当初は捉えられるが、新しい旅行商品を求めるマスツーリズムによって「取り込まれ」ようとした。同時にマスツーリズムも「エコツーリズム的」な特性を備えた「マスツーリズムの中の」エコツアーを提供し始める。一方、エコツーリズム側は、安定した運営のために、一般の観光客が多数参加できる「ソフト」なエコツアーに移行した。

このエコツーリズムの動きは、1990年代前半から台頭したサステイナブルデベロップメント(持続可能な発展)という社会的圧力を受けて拡大した。そして産業や企業のグリーン化・エコ化を進めなければならないマスツーリズム側と自律的(地域外から支配されず)に持続可能な地域運営を進めたいという地域側の動きに引き継がれ、「サステイナブルツーリズム(持続可能な観光)」を双方が目指すことになった。

このマスツーリズムとエコツーリズムの関係は、オペレーティングシステムである「ウインドウズ」と新興の「リナックス」の関係によく似ている⁸。圧倒的な力を持つウインドウズに対して、まったく異なる「オープンソース」という概念でつくられたリナックスは、巨大なウインドウズの世界に取り込まれようとする圧力を超えて存在している。ウインドウズはマイクロソフト

8 こうした「オープンソース」化の動きは観光分野でも参考になるだろう。例えば、梅田望夫(2001)シリコンバレーは私をどう変えたか——起業の聖地での知的格闘記、新潮社、東京都、205 p. やレイモンド=エリック=スティーン(2001)伽藍とバザール—オープンソース・ソフトLinux マニフェスト—、光芒社、東京都、252 p. などが参考になる。

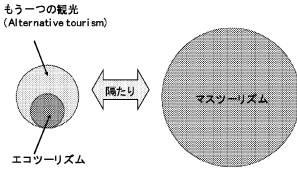


図 2-1 もう一つの観光の誕生

マスツーリズムの悪影響に対する批判や反省から「もう一つの観光」が提唱され、その具体例としてエコツーリズムは誕生した。

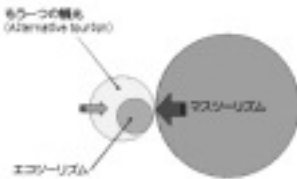


図 2-2 マスツーリズムとの接近

マスツーリズムは「新商品」としてのエコツーリズムを取り入れようとし、もう一つの観光として生み出されたエコツーリズムでも規格化・商品化が進み、一般の観光客も参加が増え、両者は接近した。

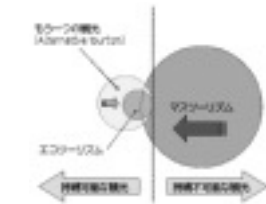


図 2-3 マスツーリズムとエコツーリズムの融合

一般の観光客が旅行商品としてのエコツーリズムに多数参加し、マスツーリズムのように多数の観光客が参加できる観光としてエコツーリズムが位置づけられた。

一方「持続可能な観光」という基準で観光の評価が始まり、マスツーリズムもそれを目指し始めた。

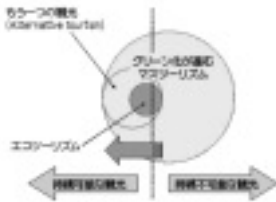


図 2-4 マスツーリズムのグリーン化

トリプルボトムラインなどの影響でマスツーリズムも本格的に持続可能な観光を目指す。エコツーリズムはその際の好例であった。

ただし、一部のエコツーリズムは自然環境に配慮できず、「持続不可能」なものも現れた。

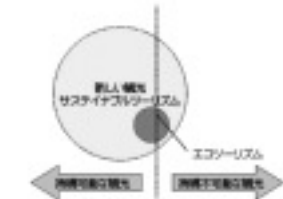


図 2-5 新しい観光の登場

もう一つの観光が目指していた方向を取り入れ、今までのマスツーリズムは持続可能な観光に変化する。エコツーリズムは其中で持続可能な観光のトップランナーとして位置づけられる。ただし、すべての観光が持続可能になるのではない。

社が独占的に製造するソフトであり、そのプログラム内容を関係者以外の者が知ることはできない。しかし、リナックスはソースコードを公開することで大勢の関心を誘い、それがプログラムの改善に貢献するというオープンソースという手法でつくられている。オープンソースによるリナックスの成功を受けて、最近ではウインドウズも「オープンソース化」する道を歩んでいる。この性質を異にするシステムは相互に影響しあうだけではなく、コンピューターを取り巻く環境の変化をそれぞれが受けながら進化した。まさにマスツーリズムとエコツーリズムのアナロジーである。

3. エコツーリズムの効果と課題

(1) エコツーリズムの特性

エコツーリズムは自然環境を保護しながら観光資源として利用しようとする新しい観光だが、もともと観光は自然環境を対象とする例が多く、優れた自然環境や手つかずの自然は、文化遺産と同じく重要な観光資源であった (Valentine, 1990)。その例として、サファリツアーや自然観察ツアーなどをあげることができる。ただし、それらはエコツーリズムとは異なる「自然環境鑑賞型観光」と呼ぶべきものである。

地域振興と観光振興に焦点が当てられがちだった従来のマスツーリズムとは異なり、エコツーリズムでは観光振興と地域振興を同時に進めながら、自然環境の保全も目指す。そのためエコツーリズムの理想的な姿は、図3のよう



図3 エコツーリズムの特性

に、自然環境の保全と地域振興、そして観光振興で示される三角形のバランスを保つことだと考えられる。ただし、どのような三角形でバランスをとるか、地域ごとに違いがあるだろう。そのバランスはエコツーリズムの理念と地域ごとのエコツーリズムの方針で決まる。

エコツーリズムの理念とは次の3点である。まず第1に、エコツアー提供

側が自然環境に与える影響を最小限にする努力(環境保全)、第2に、自然環境を利用した観光の充実(観光振興)、第3に、観光地(いわゆる「地元」)の利益の創出(地域振興)である。以上の基本理念に加えて、学習プログラムや解説によって観光客も自然環境を体験しながら学ぶ機会(学習機会)を得る。また保全のためには、対象となる自然環境を把握(調査研究)する必要がある。さらには地域の自然環境の管理もテーマとなる(敷田・森重、2004)。

このような理念はあるが、「エコツーリズムは観光」という枠組みは変わらない。それには反論もあり、エコツーリズムは自然環境保全の手段であるという考えや、観光ではなく環境学習プログラムだという主張もなされている。しかし観光客が観光地に来て、そこで観光関係者が「エンターテインメント」の機会を提供している構造がある限り、エコツーリズムは自然環境を対象とする「観光」の1形態である。

ではどこが従来の観光と違うのであろうか。この点にかんして敷田・森重(2001b)は、エコツーリズムは、地域の自然環境や資源を地域自らで評価し、地域側でエコツアーという「完成品」をつくるのが基本であると述べている。それに対しマスツーリズムでは、地域外の観光関係者がツアーをデザイン(企画)し、地域はそれに「部品」である地域の自然環境などを提供するだけに終わることが多い。デザインする者と部品の提供者というこの「立場の違い」は重要である。マスツーリズムでは、地域が部品を一方的または安く提供させられた結果、地域外の観光関係者への依存が進んだ。

(2) エコツーリズムの効果と課題

期待されて誕生しただけあってエコツーリズムには利点が多い。まず、自然環境保全を理念としているので、従来の観光とは異なり、観光地の自然環境を保全しやすい。次に、環境配慮が旅行業界の「標準」になれば、環境保全への配慮を怠りがちだった従来の観光にも「グリーン化」を迫ることができる。また、地域外の観光関係者の利益が優先されがちだった従来の観光とは異なり、地域主導の振興を期待できる。さらに観光客も、今までの物見遊山型の自然鑑賞型観光ではなく、自然環境を体験しながら学習プログラムや解説で学ぶ機会を得ることができると考えられる。もちろんこうした「期待」

は、実証研究や先行事例の検証を待たなければならないが、最初から「理念」が示されている観光であるエコツーリズムは目標を定めやすく「有利」だと思われる。

こうした直接的な利点のほかにも、エコツーリズムの推進は長期的には「地域の構造変化」を誘導する。ここで地域の構造変化とは、今まで固定されていた地域内の関係に変化が生ずることである。旅行商品の提供に関連して、さまざまなサービスを提供する観光関係者が観光にかかわっているが、従来の観光とは違い、エコツーリズムでは自然解説ガイドやインタプリター（解説者）、あるいは研究者などの自然環境保全にかかわる関係者までが広く観光に関与することになる。こうした関与は、地域内の関係者のネットワーク形成を誘導し、雇用創出も含めた関係者同士の新たな連携や協働を生み出し、それが最終的に「地域の構造変化」につながる可能性を含む（敷田ら、2001を参照）。このように、地域内の社会システムが構造変化することが、エコツーリズムの本当の「効果」である。

以上のような効果が期待できるエコツーリズムだが、ある意味でそれが発揮されるのは「理想的な」エコツーリズムが実現した場合である。もともとエコツーリズムは地域の自然環境や社会に影響を与える観光の一形態なので、持続可能性と同義ではない（Wall, 1997）。またエコツーリズムの効果は地域や条件による差が大きく、それは「不透明な選択肢（Ambiguous alternatives）」であるという指摘は妥当である（Clarke, 1987）。つまり、エコツーリズムだからというだけでは持続可能な利用は保証できない。マスツーリズムからエコツーリズムに転換すれば、自然環境の持続可能な利用が実現できるのではなく、むしろ自然環境の「注意深い」管理によって「持続可能な観光」となるのがエコツーリズムである（敷田・森重、2004）。

エコツーリズムが持つこうした課題は次のように整理することができる。

- ①個々のエコツアーの負荷は小さくても、集積すれば大きな影響になる
- ②エコツーリズムが成功するほど観光客が増加し規模が拡大する
- ③エコツアーは価値の高い自然環境が対象であり、そこに直接的な負荷を与える
- ④エコツーリストは地域社会と深くかかわるので影響が深刻になりやす

い

⑤新しい観光なので、ルールやガイドラインがまだ十分ではない

⑥観光客にエコツアーの明確な選択基準がない

このような指摘を受け、自然環境保護のためにエコツーリストを排除するという主張がある。こうした「規制」の前提には、エコツーリストの無計画な増加が自然環境への負荷につながるという意見がある。しかし、優れた自然環境を体験したいという社会的ニーズがある限り、一方的な観光客排除は難しい。

また、そもそも観光による利用ばかりではなく、ほかの利用も含めて自然環境にまったく手をつけずに「保護」することは極端な選択である。地域外の自然保護関係者は、「自然保護意識が高い」と評価しても、それは採集や漁業など、地域の歴史的・民俗的な自然環境との「かかわり」まで否定することになる。そうなれば、地域（住民）が「地域外の論理」に他律的に従う地域外資本による「開発」と本質的な差はない。むしろエコツーリズムを導入するかしないかというこのような二者択一ではなく、自然環境への影響と観光振興、地域振興のバランスをとる「現実的な解決」が望ましい。

(3) エコツーリズムから持続可能な観光へ

近年、エコツーリズムから「持続可能な観光」へという議論も活発になってきた。持続可能な観光は、従来の観光、マストツーリズムから転換した新たな観光として近年期待されている。それは自然環境だけではなく、地域社会や経済的な持続可能性も含んでいるが、その優れた例としてエコツーリズムが期待されている。持続可能な観光が目指すのは、①地域の自然環境保全と②地域と観光客の対等な関係などである。この点では持続可能な観光の方向性は、エコツーリズムが目指すことと一致する（安村、2003）。

エコツーリズムでは「環境保全」・「地域振興」・「観光振興」のバランスをいかにとるかが求められるので、自然環境の保全と利用の両立、つまり「持続可能な利用」につながる可能性は高い。しかし、自然環境の持続可能な利用が基本のエコツーリズムでも、持続可能な観光が最初から保証されているわけではない。エコツーリズムを「持続可能な観光」にしてゆくためには、

その実現にさまざまな工夫といわゆるマネジメントが求められる。

一方、旅行会社のグリーン化を含む観光産業全体の「持続可能化」も社会から求められている課題で、業界や企業として「観光のグリーン化」に取り組む必要がある（九里・敷田・小林、2005）。この点では、持続可能な地域資源の利用を地域で目指すエコツーリズムとマストツーリズムのグリーン化は同じ方向性を持つ（図2参照）。エコツーリズム推進には、このような社会的背景がある。

4. エコツーリズムを地域から生み出すために

(1) エコツーリズムの実現プロセス

エコツーリズムの推進とは、具体的にその仕組みをつくることである。それは短期間で完成するものではなく、実現のためのプロセスがある。例えば真板は、ガラパゴス諸島や西表島などのエコツーリズムのプロセスを分析し、そこに「宝をさがし」、「磨く」、「宝を誇る」、「宝を伝える」、「宝を興す」の5段階のデザインプロセスを見出している。また、3つの段階（「意識の芽生え」・「推進の枠組みの検討」・「エコツアー実施」）があるとも言われている（寺崎ほか、2004）。このような先行研究を総合して整理すると、次のようなプロセスでエコツーリズムは推進されている。

まず地域でエコツーリズムの実現を目標とした場合、対象とする自然環境の調査や研究が進められる。それは専門家による研究であったり、地域住民による地域の自然環境の見直しや再評価というケースもあったりするが、日常生活の中に「埋没」してしまった地域の自然環境の価値を再認識する機会である。

自然環境の調査や研究から得られた知見が蓄積されると、それを利用してエコツアープログラムを作成できる。ツアーとしての魅力充実のために、外部の専門家によるガイド手法やエンターテインメント、ツアーの販売についての研修や支援が必要なこともあるが、実際に観光客を受け入れることができれば、まずは「エコツアーとしての完成」である。

しかし一度エコツアーを実施したからといって、そのままエコツーリズム

の実現ではない。エコツーリズムは、エコツアー実施を継続的に支援する仕組みで、その仕組みが継続できることが重要である。そのためには、エコツアーの実現にかかわる地域関係者が連携や協働することが必要になる。

(2) エコツーリズム創出のサーキットモデル

では実際に繰り返し可能なエコツアー創出プロセスとはどのようなものなのか。そのプロセスをモデル化したものが「持続可能なエコツーリズムを創出するためのサーキットモデル」として敷田・森重（2003）によって示されている（図4）。

モデルを簡単に紹介する。まず地域内の多様な関係者が集まり、自分たちが持つ知識やノウハウを紹介しあう。その中でエコツーリズムの推進やエコツアーの実施がテーマとなる（以上が図4の①）。次に、共通したテーマの下で、お互いの持つ知識やノウハウを共有しながら関係者間のネットワークを構築する（図4の②）。ネットワークした関係者が、地域の自然環境について学習し、エコツアーづくりを進めれば（学習コア）、エコツアーという完成品

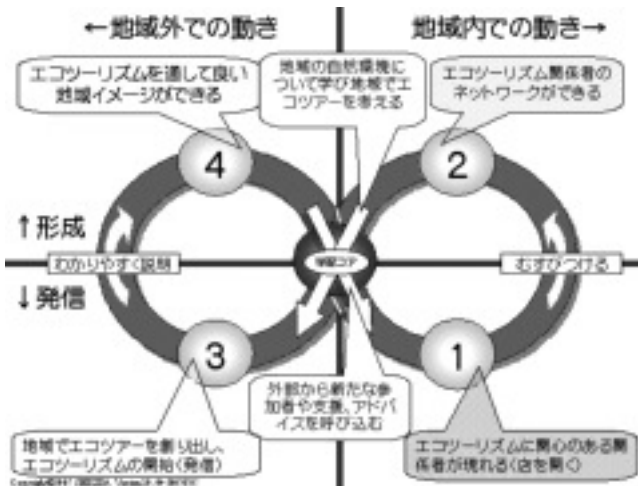


図4 エコツーリズムの創出プロセス
 (敷田・森重 (2003) によるエコツーリズムのサーキットモデル)

(商品) が生み出せる (図4の③)。

そして実施したエコツアーに参加したエコツーリストから「この地域はエコツアーで自然環境に配慮している」と評価を受けると (図4の④)、それが関係者の新たな参加を誘導する (一段高いレベルの図4の①に戻る)。

以上のサイクルを繰り返すことで、地域のエコツーリズムの推進につながる。さらに、このサーキットモデルによるエコツーリズムの推進を促進するには、地域内の結びつきを促進する役割 (図4の「結びつける」) と、発信したエコツアーの持つコンセプトを外部的に向かってわかりやすく説明する役割 (図4の「わかりやすく説明」) を強化すればよい。前者は、関係者のネットワークづくりの支援であり、後者は実施したエコツアーなども含めた成果を、わかりやすく説明する (上手に広報する) と言うことである。

5. 自律的観光とエコツーリズム

(1) 自律的観光とは何か

観光地が地域外の旅行者や資本に依存する従来の観光に対する批判として、観光地の自律を重視した「自律的観光」が提唱されている。その逆は、地域外からコントロールされる「他律的観光」である。

この点にかんして石森 (2001、2002) は「地域主導で創出する持続可能な観光が自律的観光である」と述べている。ただし、自律的観光は、地域自前

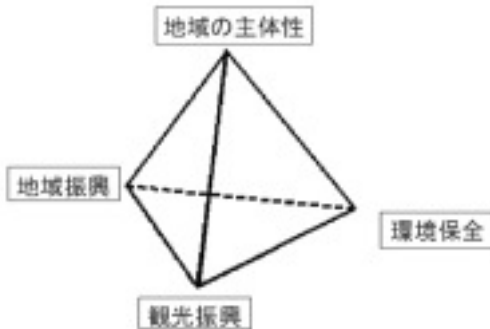


図5 エコツーリズムの特性と地域の主体性

主義ではなく、地域外に一部を頼ることも含む、地域による主体性を持った観光である。地域によって生み出される観光サービスやツアーが、必ずしもすべて地域資源を使い、すべてを地域内の観光関係者の手でという必要はなく、地域が「観光システム (観光サービス

を提供する仕組みの全体)」を主体的にデザインできるかどうかという、地域の自律がむしろ重要であろう。

このような自律的観光が最近重視されるのは、地域が自律的に観光システムをデザインすれば、観光利益の地域外への漏出⁹を防ぐことができ、加えて地域や観光を取り巻く環境変化にも順応的に対応できるからだ。さらに「観光の負のインパクト」¹⁰の地域への一方的な押しつけも回避できる可能性が高い。

自律的観光は、本稿のテーマであるエコツーリズムにとってどのような意味を持つのだろうか。それは、前述したエコツーリズムの特性の3要素「観光振興」・「地域振興」・「環境保全」のバランスを地域が「決定」できるとだと考えられる。図5の三角錐モデルに示すように、3要素で構成される三角形の各頂点から、上方の1点に向かって伸ばした直線の交点(頂点)が「地域の主体性」である。そしてこの三角形が地域の意図どおりの形を保てるのが自律的観光が実現している状態である。逆にそれがコントロールできないと、地域の関係者の意図に反して、例えば環境保全が軽視されて、観光振興を優先してしまうなどの問題が起きる。

以上のように、地域が主体的に観光の方向性をデザインできるという自律的観光の実現は、エコツーリズムの推進で関係者が考えなければならない重要なテーマである。

(2) 自律的観光から持続可能な地域へ

地域の自然環境の価値を地域の関係者が高め、エコツアーという「旅行商

9 域外の勢力によってコントロールされれば、地域からの経済的リークが大きくなることは、Honey (1999) ほかによって繰り返し指摘されている。

10 アリスター=マーシソン、ジオフリー=ウォール(1990)、観光のクロスインパクト、大明堂、東京都、p.294。(本書の原著は、Mathieson, A. and Wall, G. (1982), *Tourism: Economic, Physical and Social Impacts*, Longman, New York, p.208.)を参照。この本が書かれたのはずいぶん以前だが、地域の自然環境や社会に与える影響にかんして明確に解説されている。参照すべき一冊である。

品」をつくるエコツーリズムと、自然環境などの地域資源という「部品」を外部に提供するだけのマストツーリズムには大きな違いがある。従来の観光、マストツーリズムでは、地域で主体的に観光をデザインできず、地域側は地域外の旅行業者に依存し、観光客のニーズに合わせて地域資源という「部品」を提供させられてきた。しかしエコツーリズムでは、その理念を実現しようとする中で、地域が観光システムをデザインする「自律的観光」につながる。

エコツーリズムによって自律的観光を目指すことが地域にとって有利なのは、地域の自律性の回復のためだけではない。前述したように、それが「持続可能な観光」の推進につながるからである。エコツーリズムの推進とは、その理念に含まれる環境保全・地域振興・観光振興のバランスのとれた実現である。それは社会・経済・環境面での持続可能性の追求というトリプルボトムラインを満たす持続可能な観光の要件と一致する。

さらに観光の特性である地域内の関係者の連関からは、持続可能な観光から「持続可能な地域」を実現できる可能性も見えてくる。環境破壊の20世紀を終え、21世紀に入っている現在、地域の持続可能性を重視した「持続可能な地域（サステイナブルコミュニティ）」の実現が重要課題となっている（祖田・諸富 2004）。それは地域の関係者が当事者となってつくる、社会・経済・環境という3要素が持続可能な地域である。

しかし、持続可能な地域の実現をどこから手をつければいいのか、地域の環境保全と地域経済の振興は果たして両立可能なのか、という現実はきびしい。その点で「理想的なエコツーリズムの実現」という具体的な目標を地域で示す意味は大きい。その理由は、エコツーリズムが自然環境などの地域資源の持続可能な利用を考えた上で、観光による地域経済の振興も視野に入るといふ、地域の関係者にとって「わかりやすい目標」だからだ。同じ目標でも、「純粋な」環境保全対策などが地域経済の振興に直接寄与しにくいことと比較して有利である。

さらに、多様な関係者が連携する観光としてのエコツーリズムは、環境保全や教育関係者まで参加して地域内のネットワークを形成できる。また、自然環境などの地域資源を持続可能な形で利用する工夫や旅行商品の創出など

の「創造的な活動」は、地域の関係者の能力向上、つまり「エンパワーメント」につながる。

以上のように、エコツーリズムから自律的観光、持続可能な観光を目指すことは現実的な選択であり、それが持続可能な地域づくりにつながる。そのうえ地域内のネットワークの形成や関係する個人のエンパワーメントを惹起できるので、エコツーリズムによる持続可能な地域づくりは優れている。

もちろんエコツーリズムの推進は歴史も浅く、地域側が観光でリーダーシップをとっている事例も現実には少ないので、それは「不透明な選択肢」であるという指摘もある。しかし、地域の自律と持続可能な地域の実現の二兎を追うことができるエコツーリズムに期待は集まる。観光を通して自律的に持続可能な地域を実現できるエコツーリズムは、未知数であるがゆえの不透明さを差し引いても魅力的であろう。

エコツーリズムというシンボリックな言葉を抛り所に、地域の自律性を回復し、持続可能な観光、そして持続可能な地域を目指すことは、遠すぎる地への旅ではない。

(引用・参考文献)

- トフラー＝アルビン (1980) 第三の波、徳山二郎編、日本放送出版協会、東京都、642 p。
- Blamey, R. K. (2001) Principles of Ecotourism, The Encyclopedia of Ecotourism, David B. Weaver ed., CABI Publishing, U.S.A., pp.5-22.
- Boo, E. (1992)エコ・ツーリズム計画 (Planning for Ecotourism)、国立公園、501、pp.2-7。
- Cater, E. et al. (1994) Ecotourism: a Sustainable Option?, E., Cater and G., Lowman eds., John Wiley and Sons, New York, 218p.
- Clarke, W. C. (1987) Introduction, Ambiguous Alternatives: Tourism in Small Developing Countries, S., Britton and W. C., Clarke eds., The University of South Pacific, Suva, Fiji, pp.1-7p.
- Duffie, J. (1981) Who Will Watch the Birdwatchers?, Wildlife Review, 9(7), pp. 23-24.

- French, C. N. et al. (1995) *Principles of Tourism*, Longman Australia, Melbourne, 375p.
- Honey, M. (1999) *Ecotourism and Sustainable Development-Who Owns Paradise?-,* Island Press, Washington, 405p.
- 石森秀三 (2001) 内発的観光開発と自律的観光、国立民俗学博物館調査報告 へリテージ・ツーリズムの総合的研究、21、pp.5-19。
- 石森秀三 (2002) 21世紀は「自律的観光の時代」、科学、72(7)、pp.706-709。
- Laarman, J. G. and Durst, P. G. (1987) Nature Travel in the Tropics, *Journal of Forestry*, 85(5), pp.43-46.
- 真板昭夫 (2007) 「エコツーリズムデザインの実践的展開とその特色」桑田政美編『観光デザイン学の創造』世界思想社、pp.139-168。
- アリスター＝マーシソン、ジオフリー＝ウォール (1990) 観光のクロスインパクト、大明堂、東京都、294 p. (Mathieson, A. and Wall, G. (1982) *Tourism: Economic, Physical and Social Impacts*, Longman, New York, 208p.)
- McElroy, J. L. and deAlbuquerque, K. (1990) Managing Small-island Sustainability: Towards a Systems Design, *Nature • Resources*, 26(2), pp.23-29.
- 岡島成行 (1990) アメリカの環境保護運動、岩波書店、東京都、pp.212。
- Pearce, D. (1987) *Tourism Today: A Geographical Analysis Second Edition*, Longman, England, 202p.
- Romeril, M. (1989) *Tourism and the Environment-Accord or Discord?-,* *Tourism Management*, Sep., 1989, pp.204-208.
- 九里徳泰・敷田麻実・小林裕和 (2005) 持続可能な観光 — そのフレームワークと概念の体系化への試考、日本観光研究学会第20回全国大会学術論文集、pp.253-254。
- 敷田麻実・森重昌之 (2001a) 観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性、国立民族学博物館調査報告、23、pp.83-100。
- 敷田麻実・森重昌之 (2001b) エコツーリズムによる地域の持続的発展の可能性：石川県泊山麓のケーススタディから見た「環境に優しい観光」の未来、環境経済・政策学会年報、6、pp.200-215。
- 敷田麻実・森重昌之 (2003) 持続可能なエコツーリズムを地域で創出するためのモデルに関する研究、観光研究、15(1)、pp.1-10。

- 敷田麻実・森重昌之 (2004) エコシステムマネジメントにおけるエコツーリズムの管理とその役割、野生生物保護、8(2)、pp.79-88。
- 敷田麻実・森重昌之 (2006) オープンソースによる自律的観光 — デザインプロセスへの観光客の参加とその促進メカニズム —、国立民族学博物館調査報告 (「文化遺産マネジメントとツーリズムの持続的関係構築に関する研究」)、西山徳明編、61、pp.243-261。
- 敷田麻実・森重昌之・新広昭・佐々木雅幸 (2001) エコツーリズムの発展過程と構造モデル、国立民族学博物館調査報告、23、pp.111-128。
- 祖田修・諸富徹 (2004) サステイナブルコミュニティへ、持続可能な地域社会のデザイン 生存とアメニティの公共空間、植田和弘以下6名編、有斐閣、東京都、pp.227-252。
- 寺崎竜雄以下13名 (2004) エコツーリズム さあ、はじめよう!、環境省・財団法人日本交通公社編、日本交通公社、東京都、210 p.
- Troumbis, A. Y. (1991) Environmental Labeling on Services: the Case of Tourism, *Ekistics*, 58, pp.167-173.
- Valentine, P. S. (1990) Nature-Based Tourism: A Review of Prospects and Problems, *Proceedings of Congress on Coastal and Marine Tourism*, 24p.
- Wall, G. (1997) Is Ecotourism Sustainable?, *Environmental Management*, 21(4), pp.483-491.
- Weaver, D. (2001) *Ecotourism*, John Wiley & Sons, Australia, 386p.
- Wheeller, B. (1992) Alternative Tourism-A Deceptive Ploy, *Progress in Tourism, Recreation and Hospitality Management Vol.4*, pp.140-145.
- 安村克己 (2003) 新しい観光再考 — サステイナブルツーリズムの現在と展望、現代観光へのアプローチ、山上徹・堀野正人編、白桃書房、東京都、pp.211-224。
- 米倉誠一郎 (2001) 勇気の出る経営学、筑摩書房、東京都、232 p.